として育った防大卒業生としての誇りを持って堂々と前進して下さい。そして、陸・海・空それぞれに進むべき道は分かれようとも、同期生同士その友情と団結を更に強め、お互い力を合わせて、祖国日本の輝かしい将来と国際社会の平和のために身を挺して行かれんことを、お別れに当たり心から祈念して私の式辞といたします。

諸君、卒業おめでとう。

防衛大学校本科第４３期、理工学研究科第３６期及び総合安全保障研究科第１期学生卒業式における学校長式辞

（平成１１年３月２２日）

第6代学校長　松本　三郎

防衛大学校本科第４３期、理工学研究科第３６期並びに総合安全保障研究科第１期の学生諸君は、本日をもって所定の全課程を終了し、４年及び２年にわたる小原台生活に別れを告げることになりました。この間、防衛大学校における学生生活の中で、諸君が自らの青春を燃焼し、幾多の収穫と思い出を持って巣立って行かれるその事に対して、私は本校の教職員、指導教官一同と共に、心からお祝いを申し上げます。

本日のこの栄えある式典に、国務御多端の折りにもかかわらず、御臨席を賜りました小渕内閣総理大臣[注(1)]、伊藤衆議院議長[注(2)]、斎藤参議院議長[注(3)]、野呂田防衛庁長官[注(4)]をはじめ

注(1)　小渕恵三

注(2)　伊藤宗一郎

注(3)　斎藤十朗

注(4)　野呂田芳成

国会議員各位、また明石康氏[注(5)]、木村学位授与機構長[注(6)]をはじめ内外多数の来賓各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

また、卒業に至るまでの間、防衛庁自衛隊の関係者各位、官民の諸機関並びに在日米軍、各国大使館等から寄せられた御指導・御協力に対しましても、併せて厚くお礼申し上げる次第であります。

更にまた、遠路をも省みず本式典に御参列賜りました御両親・御家族の皆様方に対しましては、今日までの御協力に深く感謝申し上げるとともに、立派に成長された御子女の卒業を心からお祝いするものであります。

さて、４３１名の本科卒業生諸君 －この中には３１名の女子学生が含まれていますが－ 顧みれば平成７年の春４月、諸君は希望と緊張感に胸を震わせながら、春たけなわのここ小原台の坂を登った日のことを覚えていることでしょう。また入校後もしばらくは、慣れない学生舎生活や規律ある生活に戸惑い、将来幹部自衛官として、その生涯を防衛の職務に捧げようという決意に若干の不安を感じたことでしょう。しかし、それからの４年間、「模倣実践、切磋琢磨、自主自律、率先垂範」を各学年の合い言葉に、厳しい団体生活の中で勉学や訓練に励み、幾多の苦しい障害を乗り越え、試練に耐え、諸君は大きく逞しく成長いたしました。かくして、幹部自衛官となるべき決意と資質は揺るぎないものとなり、今や胸を張って堂々と卒業していく諸君を、私は自信を持って送り出すことができます。

タイ王国６名の留学生諸君に対しましても、心から祝福を贈るものであります。異なる文化の下で、日本の友人と寝食を共にしつつ学んだこの貴重な経験は、必ずや将来諸君が誇り得る豊かな財産となるでありましょう。諸君の母国に帰ってからの大きな活躍を期待しています。

さて、卒業生諸君が入校以来しばしば耳にしてきたように、本校における教育目的の根幹をなすものは、「真の紳士淑女にして、真の武人」を育成することにあります。そのため本校では、学生諸君が「広い知識と深い専門」を身に付け、それを応用して自ら問題を発見し解決する知恵を修得することに教育の重点を置いてきました。こうした知識と知恵のある人を「教養の高い人」と呼びますが、それは正邪の区別を高い見識で判断し、正しいと考えることを実行できる人であります。幹部自衛

注(5)　元国連人道問題担当事務次長

注(6)　木村　毅

官に必須の条件は、この意味での高い教養であり、その基盤を培うという観点から、本校では外国のどの士官学校にも負けぬ充実した大学教育が行われ、諸君はそこから多くのことを学びました。

一方本校は、生涯の天職として幹部自衛官の道を選んだ諸君に、必要とされる専門的資質の基盤を付与することに努めてきました。「百年兵を養うは、ただの一日のため」という言葉があります。また、ダートマスにある英海軍兵学校には「心にゆるみはないか、腕に力は抜けていないか」の有名な碑文があります。わが防衛大学校の庭にも、吉田茂元総理の「居於治不忘乱」の言葉を刻んだ石碑があります。いつ起こるか判らぬ危機に備えて、常に心をゆるめず兵を養い、力を鍛えておくのは難しいことです。しかし諸君は敢えてこの困難に挑戦し、いつ起こるか判らぬ国家の危機に自らの生涯を捧げることにつき、「揺るぎない使命感」を確立し、「いかなる状態においてもそれを成し遂げる勇気と責任感」を自覚し、更に「いかなる事態にも耐え得る不屈の心身」を練磨するため、この４年間不断の精進を重ね、立派にその期待に応えてくれました。

第１期生以来１万８千人を越える諸君の先輩達は、こうした防衛大学校における教育の成果を、一旦緩急に備えての日常の地道な勤務訓練の中で、更に国連ＰＫＯ活動や様々な災害の救援活動等の中で黙々たる内にも見事に発揮してくれております。国民に信頼される、また国際社会に信頼される自衛隊の道を一歩一歩着実に築いてきてくれたといえましょう。

こうした先輩達の業績を受け継いで、これから諸君の活躍する２１世紀の世界は、あらゆる意味で複雑化、多様化が進み、内外の情勢は益々不透明で予測し難くなることは必至です。そこでは、いかなる任務に就くにせよ、広い視野と高い視点に立った創造的で柔軟な思考力と的確な判断力、そして豊かな国際感覚が求められることになります。こうした時代の大きな節目に卒業を迎えた諸君に対し、幹部自衛官としての誇り高い任務を全うすべく、不断の研鑽と、気品に満ちた「一人間としての修業」を怠らぬよう強く望む次第であります。

次に、理工学研究科６５名の卒業生諸君　－この中にはタイ王国からの留学生２名が含まれていますが－　諸君に対し一言申し述べます。諸君は、理工学に関する大学院レベルの専門的知識と技能を修得し、研究すべく２年の歳月を本校で過ごしました。この間、頭脳の充電を図り、将来への大きな飛躍の基盤を培う貴重な体験を積んだのであります。最近の科学技術の著しい進歩は、軍事面においても装備の高性能化、複雑

化などの質的変化を生み、軍事戦略及び戦術に大きな変革をもたらしていることは周知の事実であります。今後諸君は、それぞれ新しい任務に就かれることになりますが、一層の研鑽に努められ、益々重要になりつつある自衛隊の科学技術の分野における発展向上に尽力されるよう、切望するものであります。

また今年とくに喜ぶべきことは、２年前に新設された総合安全保障研究科の第１期生２１名が卒業を迎えたことであります。諸君は安全保障に関わる諸問題について、総合的視野からの判断能力や政策形成の科学的分析手法を学ぶべく、この２年間研鑽に努め、貴重な体験を積み立派な成果を挙げてきました。わが国唯一の本研究科を卒業する諸君のこれからの活躍を多くの人が見守っています。第１期生としての誇りと自信をもって、それぞれの与えられた任務を果たし大成されることを切に期待しています。

さて、諸君の小原台生活の幕は、いままさに閉じられようとしております。これから先、諸君のあとに続く後輩達の模範となるよう、いかなる部署、いかなる境涯にあっても、学生綱領の謳う「廉恥、真勇、礼節」を座右として育った防大卒業生としての誇りを持って堂々と前進して下さい。そして、陸・海・空自衛隊それぞれに進むべき道は分かれようとも、同期生同士その友情と団結を更に強め、お互い力を合わせて、祖国日本の輝かしい将来と国際社会の平和のために身を挺して行かれんことを、お別れに当たり心から祈念して私の式辞といたします。

諸君、卒業おめでとう。